

展示の構成と作品紹介

〈別紙1-1〉

1、ウィーン万国博覧会への参加準備と湯島の博覧会

明治4年（1871）9月、日本政府はウィーン万国博覧会への参加を決定し、翌年の明治5年（1872）からは、博覧会の告知、博覧会事務局の設置、博覧会御用掛の任命、各地からの物産調書・出品物の収集、予算の計上などを行なっていました。明治4年9月には、日本の天産物（鉱物や水産物、植物、動物など）の収集と古器旧物（歴史的な資料）の保存を目的に文部省博物局が設置されましたが、万博への参加決定によって、より一層各地から出品物が寄せられるようになり、博物局の資料も充実していました。翌年の明治5年には、湯島聖堂の大成殿を会場として大規模な博覧会も開催され、好評を博しました。

このコーナーでは、ウィーン万博への出品の呼びかけを示す文書や、湯島聖堂での博覧会を描いた浮世絵などを展示し、「ウィーン万国博覧会への参加準備のようす」を紹介します。

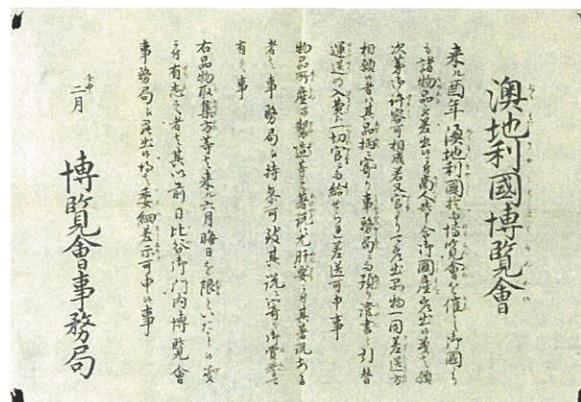


Photo.02

壬申二月澳大利國博覽會出品呼びかけ
明治5年〔1872〕（渋沢史料館蔵）

博覧會事務局から全国へ、ウィーン万国博覧会への出品が呼びかけられた。



Photo.03

「古今珍物集覽 元昌平坂聖堂ニ於て」
二代歌川国輝 明治5年〔1872〕（個人蔵）

湯島聖堂での博覧会の展示物が並べて描かれている。絵画、武具、衣装、楽器、鳥類、魚類など、多岐にわたる分野の「古今珍物」が集められたことがわかる。



Photo.04

「博覧會諸人群集之図 元昌平坂ニ於テ」
昇斎一景 明治5年〔1872〕（個人蔵）

湯島聖堂で行われた博覧会に人々が詰めかけた様子が描かれている。ウィーン万博に出展された名古屋城の金鯱が湯島でも展示されていることがわかる。

2、ウィーン万国博覧会 日本の出品物

日本からの出品物は、皮革、和紙、染織、家屋の雛形、人形、生活具、農具、楽器、さらには庭園など多岐にわたり、教育、日常生活、科学、各産業、農業、軍隊などについても紹介されました。さらに、名古屋城の金鯱、鎌倉大仏の張子、二間（約3.5m）の大提灯など、制作技術の高さを伝える大型のものも出品されました。日本館の出品物や土産物は、ヨーロッパの人々に大変好評で、それはやがてヨーロッパでの日本趣味＝ジャポニスムにもつながっていきます。

このコーナーでは、ウィーン万国博覧会で実際に展示された日本からの出品物の数々をご紹介します。



Photo.05

染付御所車蒔絵大花瓶
(有田ポーセリンパーク蔵)

約200cm（六尺二寸）ある大きな花瓶は、博覧会の日本館内部を撮影した写真にも写っている。会場でも存在感のある出品物であったことがうかがえる。



Photo.07

木製人形

(ウィーン大学東アジア研究所日本学科蔵)



Photo.06

金属製灯籠 ©Sandro E. E. Zanzinger
(レオポルトシュタット地区博物館蔵)

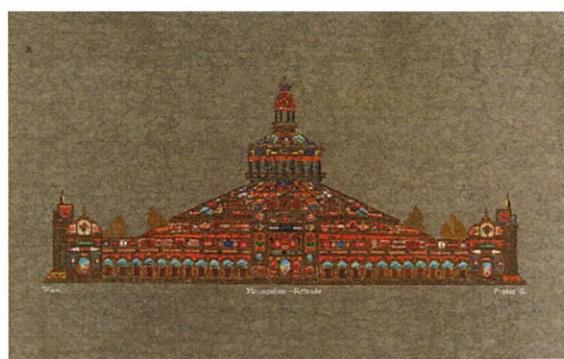


Photo.08

シガーリングのコラージュによるロトゥンデ
(JTIオーストリアコレクション)

シガーリングを貼り合わせて博覧会のシンボルパビリオンであるロトゥンデを形づくっている作品。



©Pedro Salvadore

Photo.09

装飾メアシャムパイプ
(JTIオーストリアコレクション)

豪華に装飾されたゴシック建築の塔の形をしているメアシャムパイプ。ウィーン万国博覧会のために制作された。



Photo.10

装飾メアシャムパイプ
(JTIオーストリアコレクション)

アジア、オーストラリア、アメリカ、アフリカの4つの大陸を具現化した4人の人物が担ぐ地球の上に、ヨーロッパを具現化した女性が、芸術と科学の指導者として君臨するかのように表現されている。



©Sandro E. E. Zanzinger

Photo.11

記念カード
(レオポルトシュタット地区博物館蔵)

各パビリオンなどの写真をカードにした土産物。
日本庭園を写している。

3、ウィーン万国博覧会後の日本

ウィーン万国博覧会では、日本の豊かさと技術力の高さを世界にアピールすることに成功しました。特に工芸品の分野の評判は高く、輸出産業として発展させるための組織づくりや製作技術の見直しが模索され、そこでは万博に派遣された技術伝習生たちが貢献しました。また、国内産業の育成や在来産業の技術改良には、技術や商品の品質を競う国内での博覧会の開催やその基礎となる博物館が必要だと認識するようになりました。この動きはやがて、内国勧業博覧会の開催、さらには博物館の設立へと繋がりました。

展示では、「ウィーン万国博覧会後に日本がどのように変化していったか」を示す、報告書や工芸品、内国勧業博覧会の様子が描かれた浮世絵などの資料を展示します。

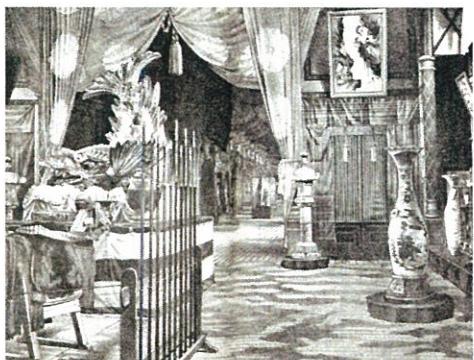


Photo.12 「澳國博覽會參同記要」
明治30年〔1897〕8月
(東京大学経済学部資料室蔵)

ウィーン万博への参加経緯のほか、ウィーン万博の会場や日本館を描いた銅版画なども収録された報告書。



Photo.13 旭焼 釉下彩山水図皿
(東京工業大学博物館蔵)

ウィーン万博参加時に顧問として活躍したゴットフリード・ワグネルが開発した釉下彩陶器。



Photo.14
「大日本内国勧業博覧会製糸器械之図」
二代歌川国明画 明治10年〔1877〕(個人蔵)
内国勧業博覧会では製糸器械の実演などが見学でき、人気を集めた。

特別展示 クリムト作品

ウィーンやパリなどで開催された万博で日本の美術工芸品や浮世絵が展示されるようになると、ヨーロッパに日本趣味=ジャポニスムが広まっていきました。本展では、日本の芸術から大きな影響を受けた世纪末ウィーンの画家グスタフ・クリムトの習作2点を特別展示します。



Photo.15
「キモノを着た女」
(油彩画「リア・ムンクの肖像 III」のための習作)
1917-1918年 (個人蔵)



Photo.16
「毛皮をまとった婦人」
(油彩画「毛長イタチの毛皮」のための習作)
1917年 個人蔵